網の中心であった。国東半島の美濃崎にある御塔山古墳（杵築市白石）と佐賀の関半島のつけ根にある亀塚古墳は別府湾に入港する船の燈台に代わるものであったと云われている。

現在では、ややもすると別府は温泉観光のみで生まれた街のように思われがちであるが、二万五千年も前の十文字原・羽室台周辺には我々の祖先である別府人が、佐賀県の腰岳の黒曜石や姫島の黒曜石を使って生活していた事実を知ることも別府住民として大切なことだと思う。

私は「別府大好き人間」の一人として、この土地を奥の深い、すばらしい歴史をもった街であることを誇りに思い、これからも住み続けていきたい。

大分の宝「別府」

齋藤　哲

もう四十年以上も前の話である。私は大学のクラブの関係で、東北の温泉地に行った。宿の女将は、宿帳に「大分県別府市」と書くのを見て、「だいぶんけんべっぷし」と読み、「別府はだいぶんけんにあるの」と怪訝そうな顔をした。その頃から別府はメジャーであり、大分県はマイナーであった。

それから数年後、私は大分県職員になった。県庁生活の大半を企画部門で過ごしたが、別府は大分の中核であり「大分の宝」であると意識していた。即ち「別府を核に大分をメジャーにする」戦略を思い描いていた。

第一段は「別府くじゅうリゾート構想」である。高度成長期を経て豊かになった国民に欧米諸国並の余暇を提供する施策であった。「リゾート」とは、フランス語で「足繁く通う」という意味である。私は「別府、湯布院、くじゅうは、リゾートそのものだ」と考え、別府湾から九州横断道路を通りくじゅうに至る構想を、ほとんど既存の観光地や施設を活用して造り上げた。その結果、ハウステンボスやシーガイヤ等多くの

大開発型リゾートが破綻する中で、大分は殆ど無傷であった。

第二は、立命館アジア太平洋大学である。立命館は開学百年を契機に、アジア太平洋地域の優秀な人材を集め、世界的大学を創設する計画をもっていた。

他方、大分県は、一村一品運動の集大成として、「世界に通用する人材の育成」を目指していた。二つの意志が合致し、九州の辺境の地に、世界的な大学を公私共同で創設する奇跡が実現することになった。

この大学は、最初は、日出インターの隣接地に建設することになっていた。しかし、山中の立地に疑問を抱いていた溝端 宏氏と私は、独断で明治維新時代村計画が頓挫した十文字原の別府市有地に立命館関係者を案内し、別府への誘致を実現したのである。この大学は予想以上に国内外の評価が高まっている。

第三は、ワールドカップの誘致である。世界代々のスポーツの祭典であるワールドカップには、まず四万五千人以上の競技場が必要である。同時に、選手やスタッフ、国内外の観光客等の宿泊施設が不可欠であった。わが国有数の観光地別府の存在が、ワールドカップの誘致を可能にしたのである。

しかし、これらの計画の中で、別府の課題も浮き彫りになった。収容能力は多いが、若者や富裕層等の宿泊に耐えるハイグレードのホテルや観光施設が欠落している。また、国際的大学や人材を活用する発想が欠如していた。この問題は、最近の別府の衰退に繋がっているように思う。別府は世界に誇る温泉、海、山等の自然景観に安住し、時代に対応する普段の努力を怠っている。温泉・酒・女性に依存し、安易な歓楽街化してしまっている。

大分の宝である「別府」の再生に必要なのは、「人」であると、今私は考えている。新しい発想で、天賦の資源や人材を活用できる強力なリーダーが求められているわけである。